

2017

数字から見る  
日本

今月の提案 Vol.46

インターネット空間を自分の居場所と  
感じている若者が62.1%

—「強いつながりを感じている」は21.8%

『子供・若者白書（旧・青少年白書）』は平成22(2010)年から作成され、毎年国会に報告されている。今年は第193回国会に提出されているのだが、今回の特集は「若者にとっての人のつながり」となっている。平成28(2016)年度に内閣府が行った「子供・若者の意識に関する調査」（平成28年12月に全国の15歳から29歳までの男女6000名を対象に実施したインターネット調査）の結果をもとにしている。同書には「若者のつながりに関する現状とそこから見える課題を考察するとともに、若者を孤立から守り、その成長を支援するために参考となる取組を紹介する。」と記されている。

同書の最初に「居場所とつながり」という調査結果が報告されている。実際の調査結果数では、居場所を①自分の部屋、②家庭、③学校、④職場、⑤地域、⑥インターネット空間の6つの場に分け、それぞれ自分の居場所と思うかを問うた回答結果、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」を合わせて①自分の部屋が89.0%、②家庭が79.9%、⑥インターネット空間が62.1%とそれぞれ比較的高い割合を占めている。

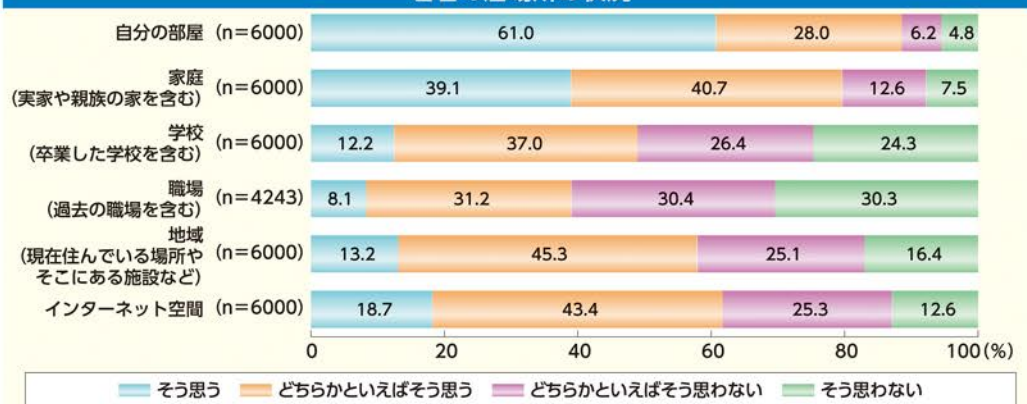
注目すべきは①自分の部屋と②家庭という基本的かつ物理的な空間に次いで、⑥インターネット空間が③学校49.2%や④職場39.3%、⑤地域58.5%よりも多いことである。特に「どちらかといえばそう思う」という回答では、⑤地域45.3%に次

いで43.4%と二番目に多い。

ところがつながり別の対象を①家族・親族、②学校で出会った友人、③職場・アルバイト関係の人、④地域の人、⑤インターネット上の人の5つのカテゴリーに分け、つながりの強さで聞いて見ると⑤インターネット上の人とは、「楽しく話せる時がある」と回答した者の割合は37.5%、「困ったときは助けてくれる」は21.8%、「強いつながりを感じている」は21.8%となっており、①の家族・親族や②の学校で出会った友人と比べてつながりの強さを感じている若者の割合はそれほど大きくない。

スマホの登場などから、「居場所」はネット空間上に広がっているが、「つながり」は現実の家族・親族や学校での関係よりは薄いようである。

若者の居場所の状況



(注) 1. 「職場（過去の職場を含む）」は就業経験者のみ回答。

2. グラフでは、「そう思う」、「どちらかといえばそう思う」それぞれの回答率について、小数点以下第2位を四捨五入しているため、両者を合わせた回答数の回答率とは合わない場合がある。

出典：内閣府「平成29年版 子供・若者白書」より

## ■参照資料

子供・若者白書について（旧青少年白書）

<http://www8.cao.go.jp/youth/suisin/hakusho.html>



## 美楽からの一言

ガラケイの頃から、「ケータイを失くしたら死んでしまう」という言葉が冗談交じりであるにせよ若い女性の間ではよく使われていた。ケータイでのつながりは、実際の身近な友人たちが主であっただろうが、それがスマホやSNSの登場により「居場所」は確実に広がっている。

「居場所」のウエイトが高まれば、出会いの機会も増え、やがて「つながり」の強さまでも逆転する日が訪れるかもしれない。